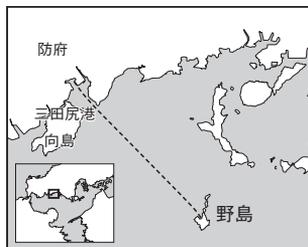


## 地域の学校を目指す 「茜島シーサイドスクール」事業

山口県防府市教育委員会 見好敏和



**野島**：防府市三田尻港の南東約15kmの瀬戸内海に位置する島。面積0.73km<sup>2</sup>、人口110人、世帯数83世帯（平成28年7月末現在）。島の周囲は断崖に囲まれているが、北側に漁港が整備され、住民のほとんどがそこに居住する。漁場に恵まれ、漁業が主産業。

### ●学校存続に向けた渡船通学制度

#### 「茜島シーサイドスクール」

野島の人口は、少子高齢化の進展とともに過疎化の波にのまれ、年々減少している。それにもない野島小・中学校の児童・生徒数も減少、存続が危ぶまれる状況となった。

そこで防府市教育委員会では、平成一三年度より野島の豊かな自然環境を活かし、心温まる教育風土の中で、知・徳・体のバランスのとれた児童・生徒を育てるために小規模特認校制度を導入し、「茜島シーサイドスクール事業」として、新たな学校づくりを始めた。野島の名は、かつて島がツツジに覆われていたことにちなむ。これには、野島地区の活性化や島の人々の拠り所としての学校を存続させ

たいという、行政だけでなく島側の強い意向もあった。

この事業によって、野島小・中学校の通学区域は防府市内全域となり、対象児童・生徒は市内在住の小学校三年生から中学校三年生までに広がった。定員は小・中学校あわせて一〇名、就学期間は原則として年度当初から一年以上の通年通学である。

就学希望者は、八月に開催される事業説明会、一月の学校開放のつどい（オープンスクール）を経て、体験入学に参加する。その後、市教育委員会での審議ののち、就学許可が出される。

茜島シーサイドスクールによる渡船通学生は、初年度に転入した三名を皮切りに、本年度までで延べ一〇八名となっている。平成二五年度からは、島出身の児童・生徒の在



漁船に乗り込み、ヒラメやカサゴの稚魚を放流する。



講師を招いてのシーカヤック体験活動。

籍がなくなり、渡船通学生のみとなった。市では、児童・生徒や保護者に対する支援として、通学にかかる渡船料の半額を補助している。さらに島の住民や団体で組織される「茜島シーサイドスクールを支援する会（以下、支援する会）」では、悪天候により船が欠航し家に帰れなくなった子どもたちに、宿や食事を提供している。このほか、地域の伝統行事や体験学習の講師を務めるなど、子どもたちの心を育てる豊かな体験活動の充実に向けた協力体制も整えている。

本事業は単年度の事業のため、次年度に通学する児童・

生徒数が確定しないことが課題である。実際に、平成二七年度は小学生の在籍がなくなり、野島小学校開校以来初めての休校となった。また、住民の高齢化により、船が欠航した際の宿泊先の確保、支援する会の後継者についても検討しなければならぬ。

### ●環境保全に対する意識を醸成する体験活動

茜島シーサイドスクールでは、地元の野島漁協の協力のもと、毎年、ヒラメ・カサゴの稚魚の放流体験を行っている。漁協から講師を招き、魚の生態や養殖技術の説明をしていただき、キャリア教育の観点では漁協の人々の思いに触れること、環境教育の観点からは生き物を扱うことの大変さなどを学ぶ。また子どもたちは、養殖されている水槽から魚を網ですくい上げた後、地元漁師の漁船に乗船し、沖合いに出て放流体験も行う。

このほか、平成一九年度には、学校の運営費と支援する会からの賛助金で四艇のシーカヤックを購入し、シーカヤック体験をスタートさせた。現在は九艇を所有し、毎年シーカヤックの講師を二日間にわたって招聘、指導を受けている。シーカヤックの構造やパドルの漕ぎ方などの説明を受けた後、実際にシー

カヤックに乗り、隊列を組んで島の周囲を操船する。こうした活動を通して、シーカヤックが転覆した時の対処法や海に落ちた人の救助法などを習得していく。今年度は、学校間交流で連携している防府市立向島小学校の児童二名も参加し、野島の青く美しい海を体感した。

このような活動を通し、児童・生徒は、海の資源を守り、自然と共生していくことの大切さなど環境保護に対する意識、雄大な自然に対する畏敬の念などを深めさせている。

### ●島の風土や伝統文化を学ぶ場として

鱧はまは、瀬戸内海沿岸で獲れる大型の肉食魚で、山口県は全国トップクラスの水揚げ量を誇る。なかでも防府市は古くから鱧漁の拠点であり、産地ならではの調理法を有している。市では「天神鱧」としてブランド化するなど、全国に向けたPRに努めている。

西島シーサイドスクールでは、平成二七年度から地元漁協青年部の協力のもと、家庭科の授業の一環として、鱧料理体験活動を行っている。水揚げされた鱧を提供していただくだけでなく、漁師の方に講師として包丁の扱い方や鱧の捌き方を指導していただいている。

子どもたちにとっては、鱧を料理するという貴重な体験を得るだけでなく、地元につながる漁法や料理法を知る機会となる。改めて野島の風土や人々の生活を深く知ることがで



漁船の上で「天神鱧」の捌きを見学する子どもたち。

ものとなつていく。

これについても、島の方を講師として招き、児童・生徒に盆口説きの内容や意味を説明していただいた上で、実際に体育館でお囃子と太鼓に合わせて盆口説きを唄う体験活動を実施している。実際に、住民と子どもたちが一緒に盆踊りの練習をするのである。この活動は公民館の「島民学級」講座との共催事業となつている。

このような活動により、野島の伝統文化の奥深さを知り、

きたと好評であつた。

「盆口説き」とは、野島に古くから伝わるある種の「説法」である。人々は盆踊りの際に、この盆口説きを鳥特有のお囃子や太鼓の音頭に合わせ唄う。盆口説きの内容は礼儀作法や年長者への敬意など、人としての生き方を示唆する



## ◆島側からみた離島通学◆

現在の野島は人口約100名、世帯数約80世帯である。高齢化率が極めて高く、恒常的な診療施設もないため、健康不安を抱えている高齢者も少なくない。また、島内では最低限の生活物資しか購入することができないため、定期的に渡船を使って買い物に出かける必要があり、高齢者の負担となっている。

このような中、島の行事や伝統文化の継承などは漁協青年部が中心となって催行している。島の運動会や文化祭などは学校との共催であり(会場は学校)、その企画・運営には青年部も加わるが、子どもたちや学校の教職員の参画が欠かせないものとなっている。

40歳代以下の住民が数えるほどしかない野島では、子どもたちの明るい笑顔と屈託のない言動は、多くの地域住民に元氣と潤いをもたらしている。登下校中の子どもたちから挨拶をされると、思わず笑顔になる。そして、そこで何かしらの会話が生まれ、孫のような子どもたちとの交流が始まる。

また、島の方々がつもつ多様な価値観と島の大自然は、子どもたちの豊かな心の成長に寄与していると感じている。島に学校があることは、住民と子どもたち双方にとって利の大きい関係ではないだろうか。

子どもたちには、この島だからこそ学ぶことができる人の心の温かさや、島の大自然の中で培うことができるたくましさや、ぜひ身につけてほしいと思っている。そして、ふるさととそこに暮らす人々を愛する心をいつまでも忘れないでほしい。

島にとって学校は必要不可欠なものである。地域の教育力をこれまで以上に活かすことのできる新しい学校の仕組みづくりや、老朽化した学校施設の改善、離島だからこそ必要となる現代のグローバル社会に対応したICT教育の環境整備など、解決すべき課題は山積しているが、今後も学校の発展的な継続のため、会としてできる限りの支援を行っていきたいと考えている。

(西島シーサイドスクールを支援する会 会長 佐子彰二)

く中で、これからの学校には、地域の文化や学びの拠点として、いつでも、誰でもが集い、学ぶことができる機能が備わることが不可欠である。そこで、学校が地域の文化財や伝承物などを収集・保管し、島の歴史・民俗資料館的な役割を担うことができなにかと考えている。住民が集い、

子どもたちと交流し、世代を超えて生き方を伝え、学ぶことができる場としてである。西島シーサイドスクールは、そのような地域の絆をつむぐコミュニティ・ミュージアムとしての役割をもった「地域の学校」を目指している。

## 見好敏和 (みよし としかず)

昭和41年生まれ。平成25年4月から防府市教育委員会教育部学校教育課の指導主事として勤務。本年度から市立野島小中学校の担当指導主事として「西島シーサイドスクール事業」の充実・発展に努めている。